

日本遺産
 風景
 葡萄畑が
 織りなす

山梨県峡東地域

静かに見守ってきました

国指定 重要文化財
 一木 造 薬師如来像（甲州市）
 奈良時代の行状の中心地を築いた薬師如来像の彫刻は、その造形から、この地域の歴史を物語る。像は、その造形から、この地域の歴史を物語る。像は、その造形から、この地域の歴史を物語る。



先人の知恵と工夫による葡萄畑の形成

甲府盆地東部の勝沼地区は、葡萄栽培が古くから行われ、葡萄にまつわる伝承の地となっています。奈良時代の名僧行基の夢に、葡萄を手にした薬師如来が現れ、その姿を刻んだのが大善寺（ぶどう寺）の薬師如来像であり、この地に葡萄栽培を伝え、これが甲州ワインの原料となる甲州葡萄であると言われています。

なりました。元々葡萄は乾燥を好む果物であるため、棚による栽培は通風が良く生育に適し、日本における葡萄栽培の原型となりました。

その後、竹に代わり自由に加工できる丈夫な針金が明治中期に導入されたことで、どのような地形にも棚が作れるようになり、屋根状に広がる葉の間から色づく葡萄の房が、サンデリアのようにぶら下がる光景が傾斜地にまで広がるようになりました。

またこの地区では、東西に流れる日川が度々氾濫し、家や畑が流されるため、明治末期以降、土砂流出を防ぐための石積みの治水施設や上流に土砂止めの堰堤などの施設が作られました。

その結果、川の氾濫が抑えられ、日川沿いの畑は水はけの良い砂地に変わり、葡萄畑への転換が進みました。現在でも、日川沿いの葡萄畑の中には、役目を終えた治水施設が幾筋もの石畳となって残っています。

